

142



143

図版 137 E 区縄文時代早期包含層出土石器⑥

第3節 その他の時期

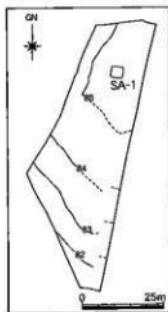
竪穴式住居

第7層上面で、竪穴式住居跡が1軒(SA-1)検出された。平面プランは3.9m×3.3mの隅丸方形で、床は貼床が施され水平が保たれていた。検出面から掘り込み底面までの深さは0.3m～0.35mで、貼床面までの深さは0.25mであった。

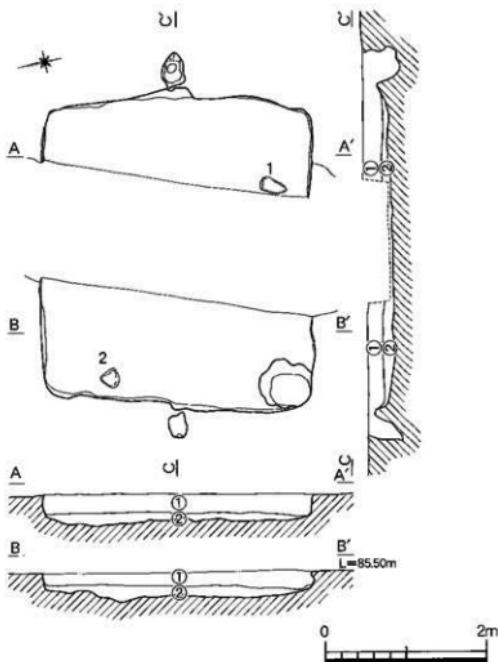
柱穴については、東西の壁面ほぼ中央の外側に2箇所確認され、直径は約0.8mで検出面からの深さは約0.5m、住居の中央に向かって柱が立つようにやや斜めに掘られていた。

遺物については、砂岩製の石皿が2点出土したが、1は貼床面で2は貼床面のやや上位で出土している。

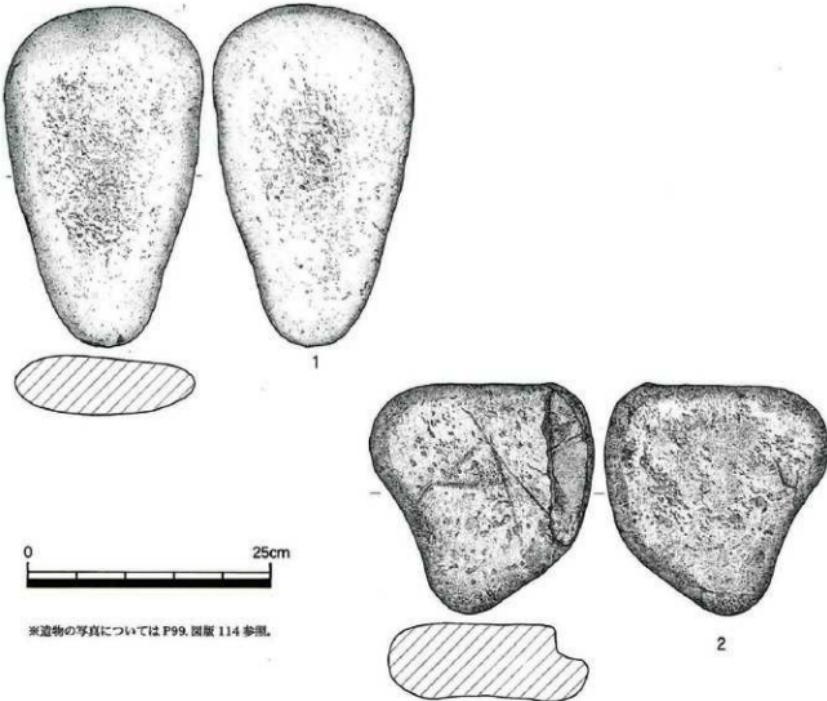
又、埋土中の炭化物について放射性炭素年代測定法により 2400 ± 40 年BPという結果を得ているため、構築時期は縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけてではないかと推測される。



第121図 SA-1位置図 (S = 1/1000)



第122図 SA-1実測図 (S = 1/60)



第123図 SA-1出土遺物実測図 ($S=1/5$)

第15表 E区SA-1出土石器計測分類表

標図 番号	実測 番号	器種	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
1	535	石皿	砂岩	35.1	20.3	6.1	6100	
2	534	石皿	砂岩	23.7	23	7.8	6300	



図版 SA-1検出（東から）



図版 SA-1（西から）

第IV章 A・C・D・F区における調査(縄文時代早期)

第1節 遺構

1. 集石遺構

C区では、8層上位から中位にかけて4基の集石遺構が検出された。

SI-8

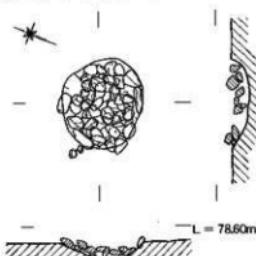
SI-8については、掘り込みの形状は平面プランが円形で断面は浅皿状を呈しており、使用されている焼礫は4kgと疎らであった。

SI-9

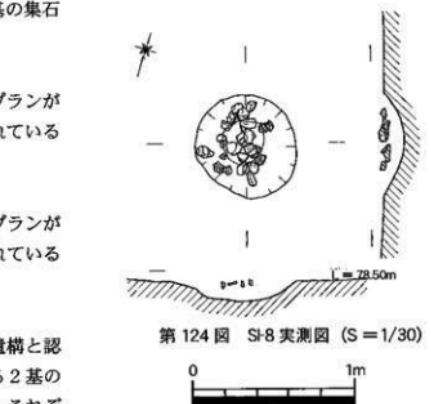
SI-9については、掘り込みの形状は平面プランが円形で断面は浅皿状を呈しており、使用されている焼礫は17.5kgと密であった。

SI-10 (1・2)

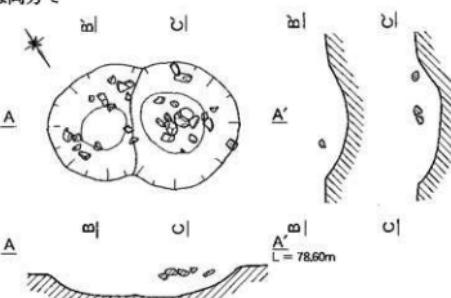
SI-10については、検出時は1基の集石遺構と認識していたが、掘り込み等を確認したところ2基の集石遺構の切り合いであることが判明した。それぞれの掘り込みの形状は、平面プランが円形で断面は浅皿状を呈しており、使用されている焼礫は両方で4kgとかなり疎らであった。



第125図 SI-9実測図 (S=1/30)



第124図 SI-8実測図 (S=1/30)



第126図 SI-10実測図 (S=1/30)

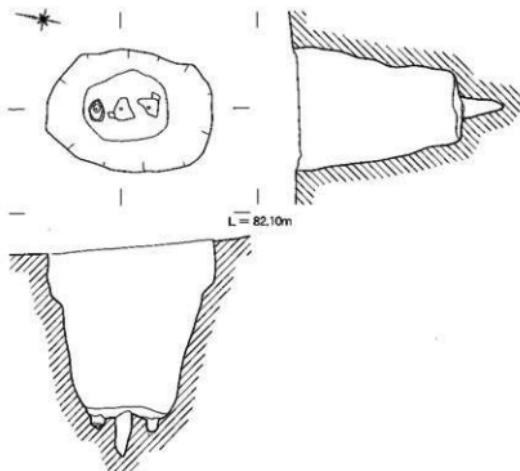
第16表 C区集石遺構観察表

集石遺構 No	検出面 の直徑 (m)	縦横面 の直徑 (m)	總 數 (個)	總 重量 (kg)	燒 1個 平均重量 (kg)	掘 込			放 射 性 素 年 代 測 定 値	共 伴 遺 物	備 考
						有無	直 徑 (m)	深 さ (m)	底 石	炭 化 物	
SI-8	VII層上位～中位	0.54	32	4.00	0.13	○	0.60	0.15	×	△	×
SI-9	VII層上位～中位	0.56	48	17.50	0.36	○	0.50	0.15	×	△	×
SI-10(1)	VII層上位～中位	0.96	31	4.00	0.13	○	0.66	0.20	×	△	×
SI-10(2)	VII層上位～中位	—	—	—	—	○	0.50	0.20	×	△	×

*炭化物の欄の△のマークは、炭化物のみが検出されたケース。

2. 脱し穴

F区の緩やかな斜面では、9層上面において1基の脱し穴とその可能性のある土坑1基計2基が検出された。



第127図 SC-1 実測図 ($S = 1/30$)

SC-1

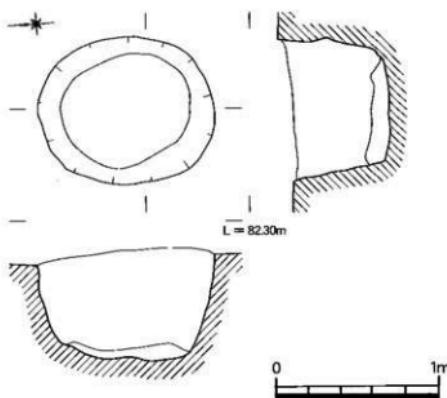
掘り込みの平面プランは長軸1m・短軸0.7mの長楕円形で、検出面から底面までの深さは1.1mであった。断面形状については、底面から0.8m～0.9mのところですばまりがみられたが、これは捕らえた獲物を逃がさないための構築者の工夫だと考えられる。

又、底には3個の逆茂木痕と思われる小穴が確認され、中央の小穴は底面から0.25m程掘りこんであった。尚、小穴で採取された炭化物については、放射性炭素年代測定法により 9950 ± 40 年BPという結果を得ている。

SC-2

掘り込みの平面プランは長軸1.2m・短軸1mの楕円形で、検出面から底面までの深さは0.7mであった。

逆茂木はみられず検出面からの深さもSC-1より浅めであるが、構築時期の深さは現存よりも0.3m～0.5m深かったと推測されるため、この土坑も脱し穴として使用された可能性があると推測される。



第128図 SC-2 実測図 ($S = 1/30$)



図版 SH-8(北から)



図版 SH-9(北から)



図版 SC-1①(北から)



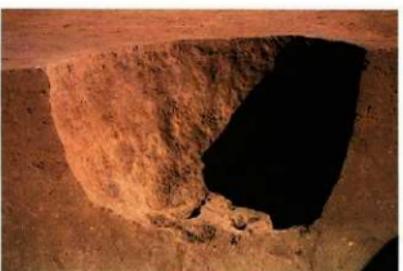
図版 SH-10(北から)



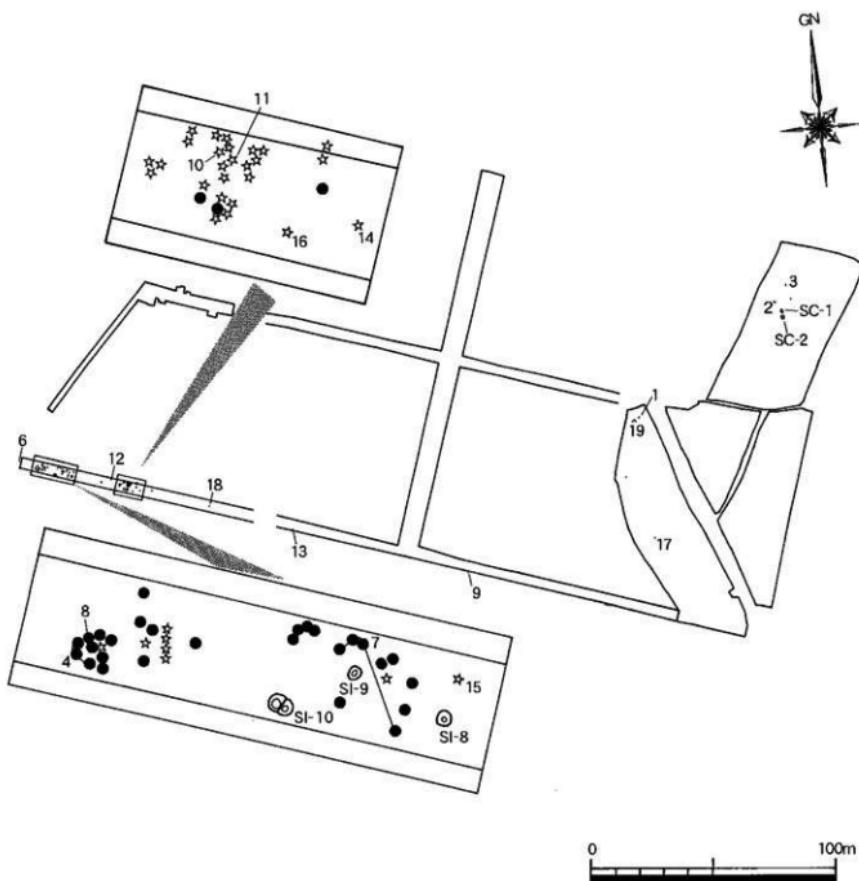
図版 SC-1②(西から)



図版 SC-2①(南西から)



図版 SC-2②(西から)



● … 個縞文系土器
☆ … 漢ノ神式土器

第2節 包含層出土遺物

A・C・D・F区では、7層中位から8層下位にかけて255点の遺物が出土した。これらの遺物はそのほとんどが縄文時代早期中葉から早期後葉のもので、土器と石器に分かれる。

1. 土器

1～8は貝殻文系の土器である。1～3は胴部に貝殻条痕文を施しその上から貝殻刺突文を重ねたものである。器形については、1・3が円筒形で2が角筒形を呈しており、1が口縁部で2・3が胴部である。1は口縁部に横位の貝殻刺突文を施し、口唇部には連続キザミ目も施している。又、1・2についてはクサビ形貼付文が施されているが、クサビの根元には櫛状工具による刺突文がみられる。4～7は円筒形の器形で貝殻刺突文のみを施すものである。4は平底の底部で、6は胴部、5・7は口縁部であるが、5・7いずれの口縁部も口唇部は平坦に仕上げられている。8については、短沈線文を施した口縁部であるが、貝殻文系の土器の一部である可能性が高いと推測される。

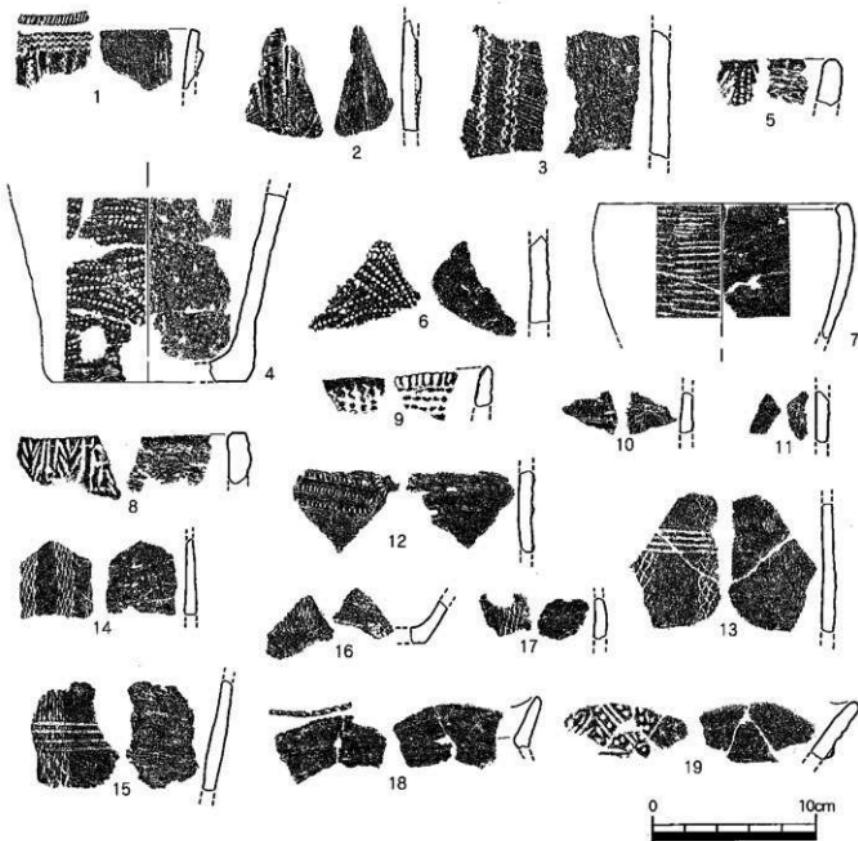
9は梢円形押型文の口縁部である。外面は縦位、内面は横位に施文されており、口唇部内面には棒状工具による連続キザミ目も施されている。

10～18は塞ノ神式土器である。10～12は細かい刻みを施した微隆帯を貼り付けた胴部であるが器形は不明である。13～16は沈線文及び撫糸文が施されたもので、13～15は胴部で16は底部である。17については縄文が施された胴部であるが、器形は不明である。18についてはラッパ状に付く口縁部であるが、貝殻によって施文するタイプの塞ノ神式土器のものではないかと推測される。

尚、13については、整理作業の段階で土器外面に付着していた炭化物を採取し、放射性炭素年代測定を行なったところ、7920±40年BPという結果を得ている。

第17表 B区遺構内土器觀察表

No	出土 グリッド	出土 層位	部位	文様及び調整		色	調	胎			備 考	遺物 整理番号	
				外側	内面			外側	内面	石英	長石	カリウム	
1	D1	VII層	口縁	貝殻条痕文 クサビ形貼付文	ナデ	7.5YR4/1 褐色	10YR5/3 にぶい黄褐	○	○			1mm以下	口唇部にキザミ目 268
2	F4	VII層	胴部	貝殻条痕文 クサビ形貼付文	ナデ	7.5YR4/3 褐色	7.5YR4/3 にぶい黄褐	○	○			1mm以下	角筒 274
3	P4	VII層	胴部	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	5YR4/4 にぶい黄褐	○	○			3mm以下	266
4	C15	VII層	胴部	貝殻刺突文	ナデ	2.5YR5/2 褐色	2.5YR5/2 褐色	○	○			3mm以下	278
5	C	VII層	口縁	貝殻刺突文	ナデ	2.5YR5/2 褐色	2.5YR5/2 褐色	○	○			3mm以下	287
6	C15	VII層	胴部	貝殻刺突文	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	○	○			2mm以下	288
7	C14	VII層	口縁	貝殻刺突文	ナデ	2.5YR5/2 褐色	10YR5/3 にぶい黄褐	○	○			3mm以下	277
8	C15	VII層	口縁	沈線	ナデ	2.5YR5/2 褐色	10YR5/3 褐色	○	○			2mm以下	293
9	C5	VII層	口縁	梢円形押型文	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	○	○			3mm以下	356
10	C13	VII層	胴部(?)	微隆帯	ナデ	10YR5/3 褐色	10YR5/2 褐色	○				2mm以上	313
11	C13	VII層	(愛)	微隆帯	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	○				1mm以下	315
12	C13	VII層	胴部	微隆帯 迷紋キザミ目	ナデ	2.5YR5/2 褐色	10YR5/3 にぶい黄褐	○	○			3mm以下	254
13	C9	VII層	胴部	沈線文 撫糸文	ナデ	10YR5/2 褐色	7.5YR5/3 にぶい黄褐	○	○			1mm以下	305
14	C12	VII層	胴部	撫糸文	ナデ	7.5YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR5/4 にぶい黄褐	○	○	○		2mm以下	464
15	C14	VII層	胴部	沈線文 撫糸文	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	2.5YR5/2 褐色	○	○	○		1mm以下	465
16	C12	VII層	底部	撫糸文	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	2.5YR5/2 褐色	○	○			2mm以下	318
17	D9	VII層	胴部	撫糸文	ナデ	10YR5/2 にぶい黄褐	10YR5/2 褐色	○	○			1mm以下	466
18	C11	VII層	口縁	ナデ	ナデ	5YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR4/3 褐色	○	○			2mm以下	323
19	D1	VII層	口縁	連点文・キザミ目 貼付文	ナデ	10YR5/2 底黄	10YR5/3 にぶい黄褐	○				1mm以下	33



第130図 A・C・D・F区縄文時代早期包含層出土土器実測図 (S = 1/3)

2. 石器

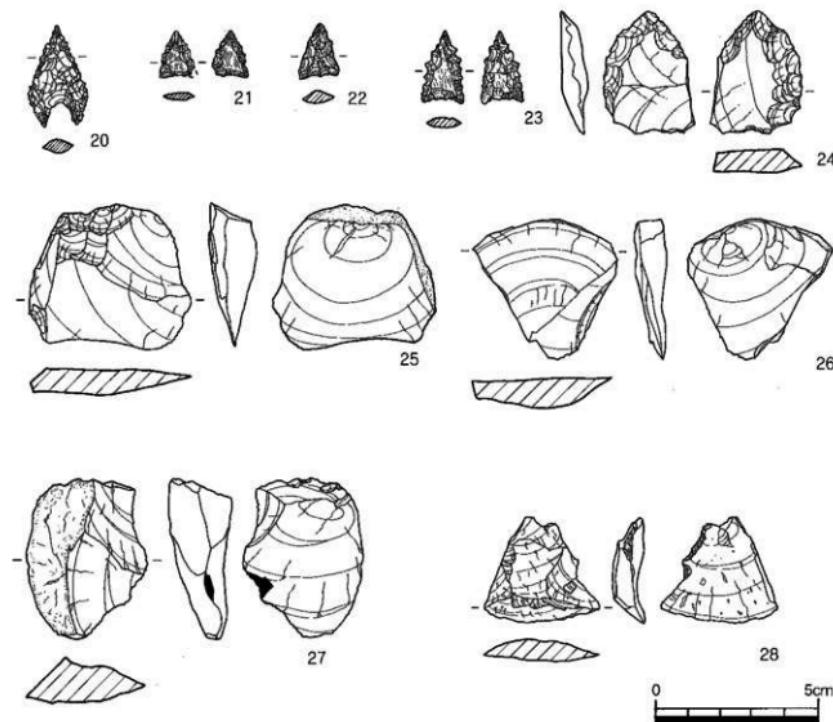
20はチャート製の打製石鏃である。平面形が抉りの深い五角形を呈しており、特徴的な形である。21は局部磨製石鏃である。頁岩製で全体の形状を整えたあと、表裏面の中央部に研磨を施す。表面の研磨部位には稜線も見られる。A区においては未製品・欠損品を含め総数5点の石鏃が出土している。他の3点はいずれも桑ノ木浦留産黒曜石製である。

22は黒曜石製の打製石鏃である。23は局部磨製石鏃である。頁岩製で全体の形状を整えたあと、表裏面の中央部に研磨を施す。24は尖頭状石器の未製品である。C区においては未製品・欠損品を含め総数6点の石鏃が出土している。他の4点はいずれもチャート製である。25～29は剥片である。剥片には流紋岩・頁岩・石英・黒曜石・砂岩など様々な石材を使用しているが、大ぶりの剥片は砂岩製のもの

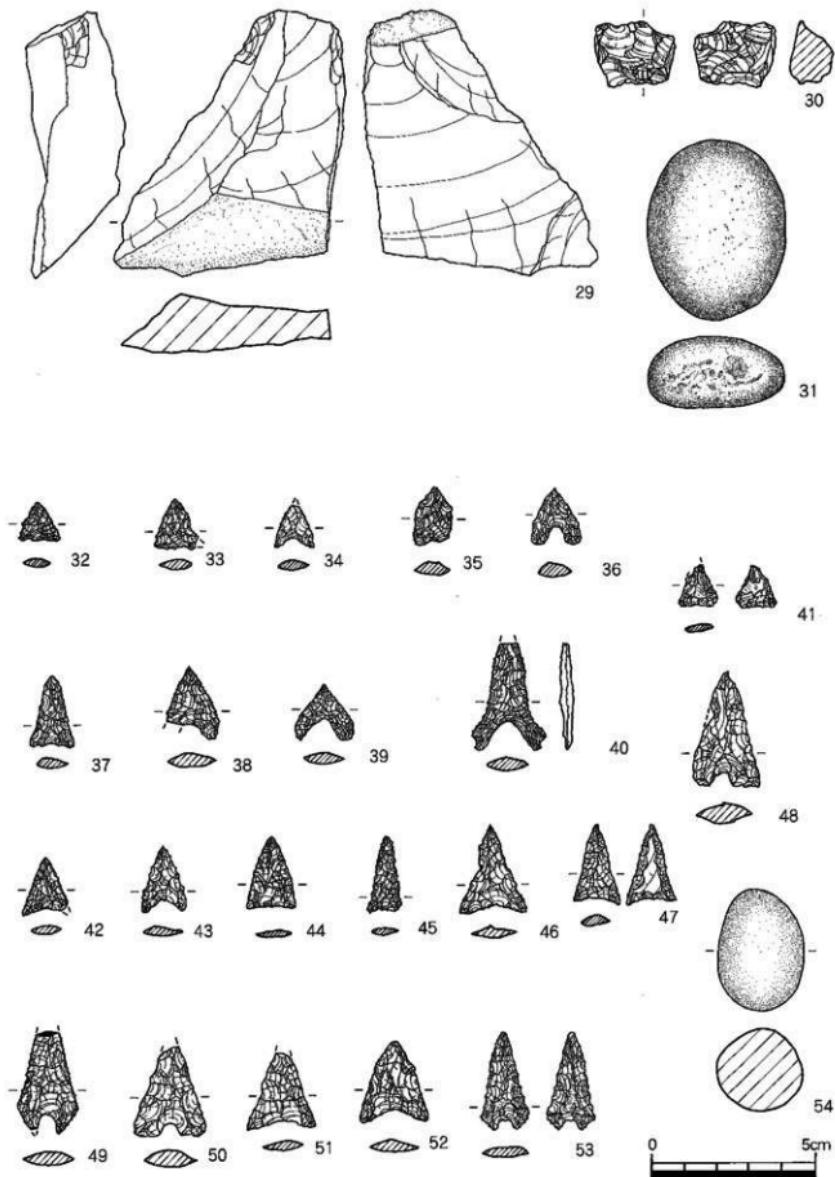
が目立つ。30は黒曜石製の石核である。作業面を何度も入れ替え剥片を作出している。31は砂岩製の敲石である。周縁部に使用痕が見られる。

32～40は打製石鏃である。抉りの深いものはチャート・ホルンフェルスなどの使用が目立ち、小型の抉りの浅い三角形鏃にはE区同様、桑ノ木津留産黒曜石の使用が目立つ。36・39は鋸形鏃である。40は姫島産の黒曜石を使用し、脚部に突出部を持つ。41は局部磨製石鏃である。頁岩製で全体の形状を整えたあと、表裏面の中央部に研磨を施す。D区においては未製品・欠損品を含め総数20点の石鏃が出土している。

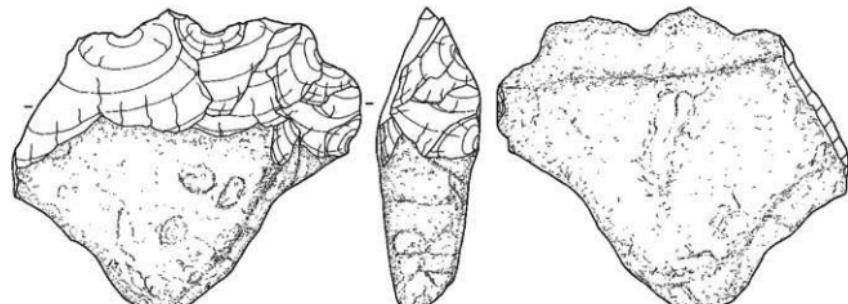
42～52は打製石鏃である。F区においてはチャートと安山岩（サヌカイトを含む）の使用が目立っている。47は主要剥離面を大きく残す。53は局部磨製石鏃である。頁岩製で全体の形状を整えたあと、表裏面の一部に研磨を施す。49・53は前述の20と同様の特徴的な形態を呈している。F区においては未製品・欠損品を含め総数14点の打製石鏃が出土している。54は小振りの敲石である。55・56は砂岩製の石核である。共に打面調整は行わず、自然面の平坦面を打面とし、一方向から剥片を作出している。134は礫器の可能性も考えられる。



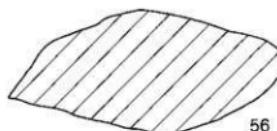
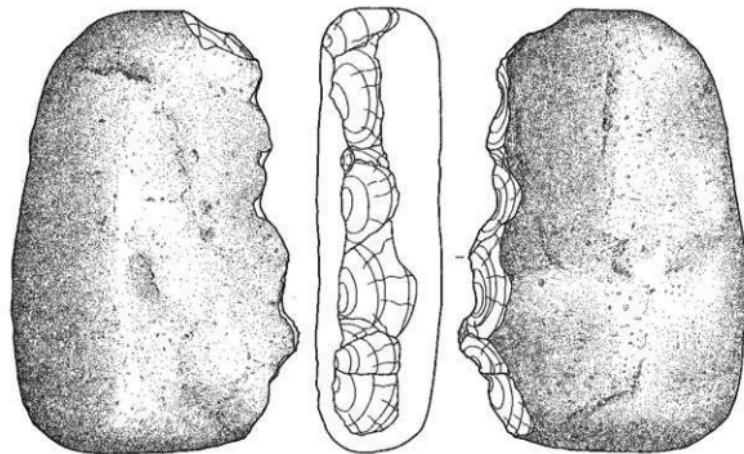
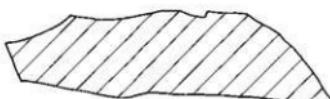
第131図 A・C・D・F区縄文時代早期包含層出土石器実測図① (S = 2/3)



第132図 A・C・D・F区縄文時代早期包含層出土石器実測図② (S = 2/3)



55

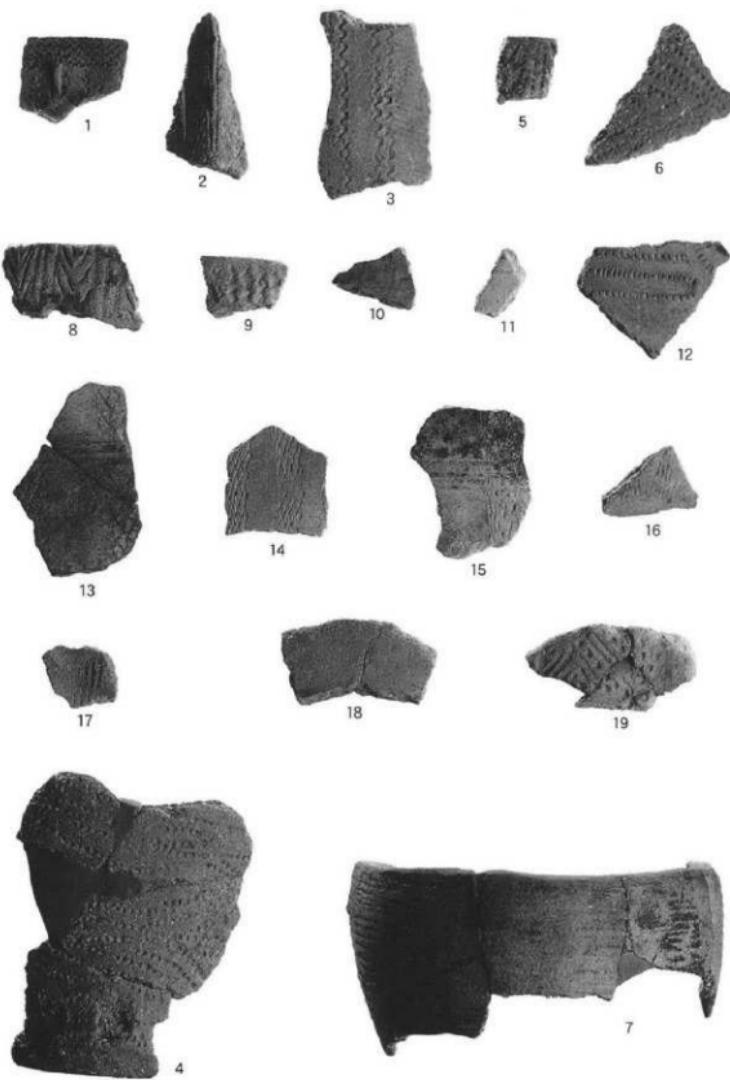


56

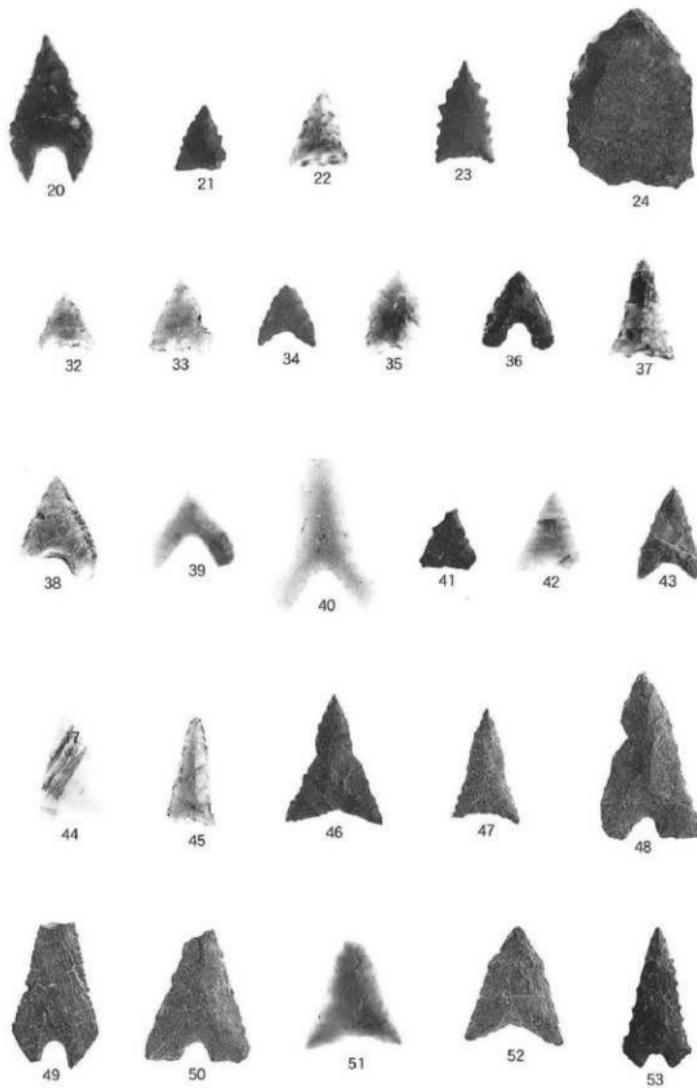
第 133 図 A・C・D・F 区縄文時代早期包含層出土石器実測図③ (S = 1/2)

第18表 A・C・D・F区包含層出土石器計測分類表

遺物 No	熱埋 No	器種	出土 グリッド	層位	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
20	438	打製石器	A 8	VII	チャート	3.2	1.8	0.4	1.8	
21	505	局部磨製石器	A 2	VII	頁岩	1.5	1.2	0.2	0.3	脚部欠損
22	396	打製石器	C 4	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	1.7	1.2	0.4	0.5	
23	468	局部磨製石器	C 14	VII	頁岩	2.3	1.3	0.3	0.7	
24	211	尖頭状石器未製品	C 14	VII	安山岩	3.8	2.8	0.8	10.3	
25	178	剥片	C 14	VII	流紋岩	4.4	5	1.45	29.0	
26	180	剥片	C 13	VII	頁岩	4.4	4.5	1	16.8	
27	197	剥片	C 14	VII	石英	4.9	3.8	2	28.5	
28	198	剥片	C 14	VII	黒曜石(上牛鼻?)	3.3	3.6	1	7.3	
29	200	剥片	C 13	VII	砂岩	8.2	7.2	3.1	134.0	
30	446	石核	C 13	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	2.15	2.6	1.4	6.4	
31	459	敲石	C 13	VII	砂岩	7.5	5.5	3	166.6	
32	240	打製石器	D 9	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	1.2	1.2	0.3	0.1	
33	398	打製石器	D 3	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	1.6	1.35	0.3	0.4	
34	393	打製石器	D 10	VII	ホルンフェルス	1.3	1.25	0.3	0.1	
35	403	打製石器	D 9	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	1.8	1.1	0.4	0.6	
36	406	打製石器	D 3	VII	チャート	1.7	1.5	0.4	0.7	
37	399	打製石器	D 1	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	2.2	1.35	0.3	0.6	
38	389	打製石器	D 3	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	2.25	1.5	0.4	1.1	脚部欠損
39	440	打製石器	D 12	VII	チャート	1.75	1.85	0.35	0.7	
40	44	打製石器	D 9	VII	黒曜石(船島)	3.35	2.3	0.45	1.5	
41	506	局部磨製石器	D 1	VII	頁岩	1.3	1.2	0.3	0.1	尖頭部欠損
42	397	打製石器	F	VII	チャート	1.8	1.4	0.3	0.5	
43	392	打製石器	F	VII	チャート	2.05	1.4	0.3	0.4	
44	441	打製石器	F	VII	チャート	2.2	1.5	0.25	0.7	
45	417	打製石器	F	VII	黒曜石(桑ノ木津留)	2.4	1.1	0.2	0.4	
46	390	打製石器	F	VII	黒曜石(針尾)	2.8	2.05	0.4	1.0	
47	402	打製石器	F	VII	砂岩	2.45	1.45	0.35	0.8	
48	234	打製石器	F	VII	安山岩(サヌカイト)	3.55	2.05	0.65	3.1	
49	384	打製石器	F	VII	安山岩(サヌカイト)	3.2	1.9	0.4	2.3	
50	218	打製石器	F	VII	安山岩(サヌカイト)	2.85	2.2	0.6	2.6	尖頭部欠損
51	224	打製石器	F	VII	チャート	2.4	2.1	0.3	1.0	尖頭部欠損
52	236	打製石器	F	VII	安山岩	2.5	2.1	0.4	1.3	
53	43	局部磨製石器	F	VII	頁岩	3	1.5	0.3	1.1	
54	460	敲石	F	VII	玄武岩	5	3.5	3.4	86.0	
55	449	石核	F	VII	砂岩	9.4	10.8	3.2	298.8	
56	458	石核	F	VII	砂岩	8.9	13.8	3.9	648.4	礫器の可能性有り



図版 147 A・C・D・F 区縄文時代早期包含層出土土器



図版 148 A・C・D・F 区縄文時代早期包含層出土石器



55



56

図版 149 F 区縄文時代早期包含層出土土器

第V章 まとめ

今回の調査区は、先述のとおり3つの地形に分けられる。A区及びC区(1~9グリッド)は谷地形、B区及びC区(10~15グリッド)は台地縁辺部、又D・E・F区は西向きの緩やかな斜面となっているため、それぞれの地形ごとに異なる特徴をもった出土傾向となっている。

1. 旧石器時代の調査について

・石器製作について

坂元遺跡ではA・Bの二つのブロックが確認され、Aブロックでは13組、Bブロックでは10組の接合資料が検出された。自然面を多く残す接合資料やナイフ形石器の接合資料も見られ、石器製作の初期段階の工程や遺跡内でのナイフ形石器の制作を示す資料が確認された。三稜尖頭器についてはホルンフェルス製のものが1点だけ出土しており、この石材を使用する石器は他に出土していないことからこの資料については搬入品であると考えられる。

使用石材については出土点数から流紋岩・頁岩が全体の82%、砂岩が11%を占める。その他の石材としてはチャート・黒曜石・ホルンフェルスなどが少量ずつそれらを補完している。

・ナイフ形石器について

坂元遺跡のA・Bブロックから出土したナイフ形石器は総数26点に及ぶ。使用石材のほとんどが流紋岩・頁岩である。素材・加工・平面の形状から下記のとおりに分類できる。

A類：縦長剥片を素材とし、その一部を折り取るように刃溝し加工を施す先断型のナイフ形石器である。素材剥片の打面部を基部にするもの(第41図5・6)と打面部を上部にするもの(第41図7・8)とが認められる。

B類：縦長剥片を素材とし、周縁に刃溝し加工を施し、全体の形状を柳葉形に整えるもので、黒曜石を素材とする1点(第41図12)が出土している。

C類：片縁と基部に刃溝し加工を施すもので、背面に稜線を持たない不定形な横剥ぎ又はななめ剥ぎの剥片を素材とするもの(第41図9~11)と背面に稜線を有する縦長剥片を素材とするもの(第41図2~4)がある。

D類：横剥ぎかななめ剥ぎの剥片を素材とする二側縁加工の切り出し型を呈するもので、大型のもの(第50図82~87)と小型のもの(第50図88~89)が認められる。また大型品の中には主要剥離面側に打瘤を取り除くための平坦加工を施しているもの(第50図82~84)も見られる。

E類：平面形が三角形を呈するナイフ形石器である。小型の剥片を横位に用いて使用し、打点部分を残すもの(第50図90・91)と残さないもの(第50図94)がある。また縦長剥片を使用するもの(第50図92・93)も認められる。

F類：縦長剥片の打面部を基部としてそこに抉りを入れるかのように刃溝し加工を施すもの(第50図95・96)である。

AブロックにはA~C類、BブロックにはD~F類のナイフ形石器が出土しており、各ブロックにおいてナイフ形石器の様相がしっかりと分かれている。前述のとおりA・Bブロックの間に時期差がないとすればこの特徴はブロックごとの性格の違いと理解できるであろう。

・石器組成について

坂元遺跡の石器組成としては様々な形態のナイフ形石器と三稜尖頭器である。本遺跡のナイフ形石器D類の特徴は延岡市赤木遺跡第I文化層のナイフ形石器B類に類似している。また瀬戸内技法の影響を受ける資料が見られることも共通点であり、時期的に近い石器群であると考えられる。しかし、剥片尖頭器を持たないこと、三稜尖頭器が客体的な存在であることという相違点も考慮すると本遺跡の石器群は赤木遺跡第I文化層にやや先行する可能性が窺える。

現在確実に赤木遺跡第I文化層に先行すると考えられている片田段階（註1）の石器群の特徴はA-T下位から見られる縦長剥片を素材とする「茂呂型」のナイフ形石器と縦長剥片を素材とするエンドスクリイパーである。これらの石器は坂元遺跡では出土していない。この状況は本遺跡の石器群が片田段階まではさかのばらないものであると考えることができるだろう。

（註1） 桑波田武志・宮田栄二 1997 「鹿児島旧石器時代研究の現状と課題」『鹿児島考古 第31号』

2 繩文時代早期の調査について

・集石遺構について

集石遺構については、全調査区において計67基検出された。最も古い時期の集石遺構はSI-72（E区）と推測される。この集石遺構については、早期の包含層からほとんど遺物が出土しなくなった層で検出されたため、草創期のものである可能性も考えられる。

次に古い集石遺構はSI-62（E区）だと思われる。この集石遺構では、ボウル状の大型の掘り込みを持ち、入り込んでいる焼穢が細かくまた少量で掘り込み中央付近に集中している、という特徴がみられる。このタイプの集石遺構は山田第1遺跡でも3基確認されているが、使用時期については山田第1遺跡のものが 9580 ± 40 年BP～ 9520 ± 40 年BP、SI-62が 9650 ± 40 年BPという分析結果を得ていることから、これらの集石遺構がほぼ同時期に使用されていた可能性が高いと推測される。

掘り込み底面付近に扁平な焼穢を配置するタイプの集石遺構については、E区で4基、B区で5基が検出されている。E区の4基については、掘り込みが浅皿状を呈しているという特徴がみられ、使用時期についてはSI-26が 9310 ± 40 年BPという結果を得ている。但し、他の3基については全てがSI-26と近い時期のものとは断定できない（SI-26よりも極端に古い時期ものはないように思われるが）。B区の4基（SI-27～30）については、掘り込みのプランや使用時期などがE区のものとは異なっていて、掘り込みはかなり大型で断面形はV字形を呈しており、使用されている焼穢はぎっしりと詰まった状態であった。尚使用時期については 8310 ± 40 年BP～ 8220 ± 40 年BPという結果を得ているので、E区の4基よりも新しい時期の集石遺構と言えよう。このように掘り込み底面付近に扁平な焼穢を配置するタイプの集石遺構にも時期幅があることが確認されたが、プランや規模にはかなり違いが見られることも事実である。

その他の掘り込みを持つ集石遺構については、全てボウル状か浅皿状の掘り込みを持ち、使用されている焼穢の密度については様々であった。これらの使用時期については、E区では 9330 ± 40 年BP～ 8600 ± 40 年BP、B区では 8690 ± 40 年BP～ 8400 ± 40 年BPといった結果を得ていることから、掘り込みを持つ集石遺構が使用される時期については、E区の方がやや古い時期まで遡れるのではないだろうか。

掘り込みを持たない集石遺構については2つのタイプが確認された。まずB区で検出されたSI-38については、焼穢が円形に集まっているという特徴がみられ、使用時期については 7840 ± 40 年BPという分析結果が得られた。又、E区で検出されたSI-71など計4基については、第7層中位で検出された

が、細かな焼讃が重ならずにある程度の範囲に散在するといったタイプのもので、使用時期については 6470 ± 40 年 BP という分析結果が得られた。

このように、当遺跡における繩文時代早期の集石造構については、9650年BP～6470年BPの資料を得ることができたが、集石造構が使用されるピークは9500年BP～8200年BPあたりだと推測される。そのなかでも特に大型の集石造構が使用されるのは8500年BP～8100年BPあたりで、この時期に当台地上で何らかの大きな変化（気候の変化や人の移動など？）があったのではないかと推測される。

・炉穴について

炉穴については、E・B 区で全く異なった事例が確認された。

まず形状であるが、E 区で検出された SC-3・4 は平面プランが長楕円形で底面はほぼ水平であるのに対し、B 区で検出された SC-6・7・8・9・10～13 については平面プランが舟形を呈し、足場から燃焼部にかけて緩やかに傾斜している。

又、使用時期についても異なる分析結果となっており、E 区の SC-3・4 が 9440 ± 50 年 BP で B 区の SC6・7, 8・9, 10 ~ 13 が 8550 年 BP ~ 8190 年 BP となっている。これらの使用時期については、先述の集石遺構の各区における使用時期とある程度重なっていることが注目される。

・包含層出土土器について

包含層出土土器については、第20表のとおりとなっている。

E区においては、貝殻文系土器なかでも前平式系や知覧系の出土が多く、押型文土器についてはやや出土量が減少する傾向にある。但し、手向山式土器については全調査区のなかで最も多く出土しており、塞ノ神式土器（撫糸文系）もある程度出土している。

B区においては、貝殻文土器は満遍なく出土しているものの、E区の前平式のように突出した出土量は見られない。それに比べると押型文土器の出土は他の調査区を圧倒しており、先述の集石遺

第19表 古元遺跡集石遺構及び炉穴変遷略表

第30步 捷云速读原文阅读与复述阶段的训练与评价

	E区	B区	A·C·D·F区
貝殼文系 貝ノ神式上器	前平系	12	28
	知覧系	41 9290 ± 40 年 BP 9250 ± 40 年 BP	4
	下利峯系	26	37
	桑ノ丸系	5	19 8400 ± 40 年 BP
	山形	9	168
	橢円	5	93
	格子口	3	7
	手向山系	36	0
押型文士器	御陵寺系	1	3
	撲糸系	54	96
		7880 ± 40 年 BP 7640 ± 40 年 BP	
	貝殼文系	0	1

構や炉穴などからも多量の押型文土器が出土している。E 区で出土した手向山式土器については全く出土していないが、塞ノ神式土器（撲糸文系）については、全調査区中最も多量に出土している。

A・C・D・F 区においては、貝殻文系土器と塞ノ神式土器の出土がみられるが、特に C 区の SC-8 ~ SC-10 付近で貝殻文系土器（知覧系）の出土が多くみられたこと、又、そこから 30m 程東側で塞ノ神式土器（撲糸文系）の集中出土範囲があったことなどが注目される状況である。

・槍先形尖頭器（第 117 図の 115）について

E 区の縄文時代早期の包含層から槍先形尖頭器の完形品が 1 点出土している。その特徴としては頁岩製で細身の左右非対称の平面形、きれいなレンズ状を呈さない断面形、湾曲する側面形、素材剥片の主要剥離面を残さないことなどが挙げられる。縄文早期の包含層からは細石刃期の資料の混在していることも考慮し、本資料の時期決定をしなければならない。旧石器時代の包含層から出土した有舌尖頭器の破片（第 56 図の 163）は薄手で、断面形はきれいなレンズ状を呈しており本資料とは形態的な相違点が多く、本資料は縄文早期のものと考えてよいだろう。

ただし E 区からは早期前葉～後葉までの土器が確認されており、この尖頭器が早期のどの段階に位置付けられるという言及は難しい。2003 年の槍先形尖頭器の集成（註 2）から、押型文期の尖頭器の特徴として左右非対称の平面形、安山岩系の石材の使用などが挙げられている。使用石材は相違点があり、E 区については早期前葉の土器が最も多く出土していることを考慮すると一応早期前葉の資料と考えておきたい。船引地区遺跡では槍先形尖頭器の出土例が急増しており、これらの資料の整理が進んでからの再検討が課題である。

（註 2） 松本 広 2003 「宮崎県における槍先形尖頭器の出現と消滅」『九州旧石器 第 7 号』

・石鎚について

本遺跡では石鎚が未製品・欠損品も含め 151 点出土した。肉眼観察であるが本遺跡の石鎚の使用石材についてはチャートの使用が最も多い、黒曜石類、流紋岩・頁岩と続く。各区ごとの土器と石鎚に使用した黒曜石を概観すると（表 21）、D・E 区では早期前葉～後葉の土器が出土しており、桑ノ木津留産黒曜石・姫島産黒曜石の使用が目立つ。B 区については早期中葉の土器を中心として出土しており、桑ノ木津留産黒曜石も見られるが特に腰岳産・針尾産などの西北九州産黒曜石が目立つ。

桑ノ木津留産黒曜石には小型の抉りの浅い三角形の石鎚への使用が目立つ。この資料は縄文早期前葉に多く見られるという指摘（註 3）や、D・E 区とともに早期前葉の土器が多く出土していることからも桑ノ木津留産黒曜石については早期前葉の段階から用いられているものと考えられる。

姫島産黒曜石については早期中葉の土器ばかりが出土した B 区ではほとんど確認されていないことから早期中葉段階まではあまり用いられなかったと考えられよう。姫島産黒曜石の使用が目立った D・E 区においては早期後半の土器も多く見られることから、この段階から姫島産黒曜石の使用が目立つようになったと考えられる。

西北九州産黒曜石については B 区においてその存在が目立つ。B 区からは早期中葉の土器が最も多く出土していることから早期の中葉段階から使用が目立つようになったと考えられる。

D・E 区では早期前葉～後葉にわたる土器が出土しており、石鎚の時期の特定も困難である。しかし、早期前葉の資料として桑ノ木津留産黒曜石を使用した三角形鎚の存在や、脚部に突出部を持つ石鎚（第 116 図の 83・84・89）は早期末葉の時期に目に付くという指摘（註 4・5）があり、このような状況の中でも時期の特定が可能な資料が散見される。また B 区では早期中葉の資料が中心に出土しているこ

とから石器も早期中葉の資料が中心と考えられるであろう。その形態的特徴を概観すると2cmを超える大きさで抉りの深い資料が多く、また鋸形鐵も見られる。

これらのような時期が特定できる資料を積み重ねていくことによって、少しずつ石器の変遷を追いかけていくことができるであろう。また、これらのはかに真ん中よりやや下に最大幅を持ち平面形が変則的な五角を呈する資料（第131図の20・第132図の49・53）や鋸歯状の縁辺を持つ抉りの浅い資料（第116図の91・第131図の23）は特に特徴的な形態を呈しており、類例の増加を待つて時期が特定できることを今後の課題とする。

（註3）馬籠亮道 2002 「桑ノ木津留産黒曜石と縄文時代早期の小型石器について」『石器原産地研究会 第2回研究集会発表資料』

（註4）金丸武司 2004 「黒曜石第2遺跡」出野町文化財調査報告書第49集

（註5）上田耕・雨宮瑞生 2003 「前原遺跡群」施兒島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

第21表 坂元遺跡縄文時代早期石器使用石材

石材／各地区	A		B		C		D		E		F		合計	
	出土点数	重量												
流紋岩・質岩	1		4		1		2		15		2		25	
チャート	1		19		4		6		24		5		59	
砂岩	0		1		0		0		4		1		6	
黒曜石（姫島）	0		1		0		4		9		0		14	
黒曜石（針尾）	0		2		0		0		0		1		3	
黒曜石（桑ノ木津留）	0		4		1		6		6		1		18	
黒曜石（巖岳）	3		8		0		1		1		0		13	
安山岩（サヌカイト）	0		2		0		0		4		4		10	
その他	0		0		0		1		2		0		3	
合計	5		41		6		20		65		14		151	

第22表 坂元遺跡縄文時代早期使用石材

石材／各地区	A		B		C		D		E		F		出土後廻地不明 点数	重量	合計
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量			
質岩	1	0.2	49	351.9	16	93.1	2	15.9	218	1253.2	2	1.9	点数	2.6	295 1718.8
流紋岩	0	0.0	26	592.2	22	169.0	2	15.3	89	867.9	0	0.0	0	0.0	139 1644.4
チャート	1	1.8	258	294.4	71	131.0	5	4.2	259	356.3	12	14.6	30	12.5	636 814.8
砂岩	0	0.0	8	793.6	10	1241.4	0	0.0	35	515.9	3	947.9	0	0.0	56 3498.8
黒曜石（姫島）	0	0.0	4	6.4	1	2.3	5	6.6	42	35.5	0	0.0	6	1.1	58 51.9
黒曜石（針尾）	0	0.0	28	57.7	0	0.0	0	0.0	7	85.0	1	1.0	3	0.1	39 143.8
黒曜石（桑ノ木津留・巖岳）	4	1.1	92	57.8	7	18.3	6	4.3	53	43.8	2	5.3	12	5.5	176 136.1
安山岩（サヌカイト）	0	0.0	24	19.1	1	10.3	1	0.0	6	10.5	5	30.5	0	0.0	37 70.4
その他	0	0.0	3	35.1	1	28.5	1	0.1	2	1.7	1	86.0	0	0.0	8 151.4
合計	6	3.1	492	2208.2	129	1693.9	22	46.4	711	3169.8	26	1087.2	51	21.8	1444 8230.4

船引地区遺跡の縄文時代早期の包含層では複数の土器型式が混在して出土することがほとんどで、遺構や遺物の時期の特定が困難な場合が多い。本遺跡でもこの状況は同様で、時期の特定に関しては自然科学分析などに頼らざるを得ない状況である。しかし本遺跡のB区については早期中葉の土器を中心として出土しており、遺構・遺物についてもこの時期のものが中心であろうと考えられる。船引地区遺跡ではこのような時期の特定が可能な資料を基に遺構・遺物の時期の決定を行っていくなければならない。

謝辞

金丸武司（田野町教育委員会）、藤木聰・松本茂・立神勇志（宮崎県埋蔵文化財センター）、阿部敬（東京大学大学院）

調査抄録

フリガナ	サカモト				
書名	坂元遺跡				
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書				
巻次	第1集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第15集				
編集者名	井田篤・秋成雅博				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引 204 番地				
発行年月日	2005年3月				
所在遺跡名	所在地	市町村:遺跡番号	北緯	東經	調査期間
坂元遺跡	清武町大字 船引字坂元	清武町:206	31° 52' 20" (日本側地形 2000)	131° 22' 10" (日本側地形 2000)	2000/4/25 ~ 2000/12/18
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
9000m ²	農業関連	集落	旧石器 縄文	集石遺構 陥し穴 炉穴 竪穴式住居 など	石器 縄文土器 など
特記事項					
縄文時代早期の埋設土器（壺形土器）の検出					

清武町埋蔵文化財調査報告書第15集

坂元遺跡

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書

発行年月日 平成17年3月29日

編集発行 清武町教育委員会
〒889-1696 宮崎県宮崎市清武町大字船引204
TEL 0985-85-1111

印 刷 小柳印刷株式会社
〒880-0803 宮崎市旭1丁目6-25
TEL 0985-24-4155 FAX 0985-24-1512

